

「ごめんね、少しだけ……許してね」

朝、沙織が求めていたことで、沙織が好きなことで、沙織のためになることなのだとしても、天乃はそれを独善的な大義名分として排除し自分が身勝手にするのだと考えて、謝罪を口にする。

たとえ沙織自身に理由があっても、自分の性的欲求の解消がしたいというものがあ  
る以上、それをいのように使いたくなかったからだ。沙織の体は魅力的だった。寝間  
着を着込んでいようと体のラインは見えているし、人によっては痩せるべきだと口に  
するだろうが、健康的な程よい肉付きの沙織は性的な食欲の前には豪勢な贖罪だ  
と言わざるを得ない。それを、今から天乃は口にするのだ

「……………」

改めて想像して喉を鳴らした天乃は、普段自分がされていることを思い浮かべ、沙  
織の頬に優しく触れる。撫でるようにしながら手の平を滑らせていき、程よく色づ  
いた健康的な肌の中、ぴたりと閉じた唇の端を親指で掠めて開き、そっと唇を合わ  
せる

「ふ……沙織……………」

寝息を遮ることが無いようにほんの一瞬。間違いで触れたかのような優しさで。

そのまま沙織が起きないように注意を払いながら、上になっている左肩を押して沙  
織を仰向けに寝させてもう一度、キスをする

(ちよつと、かさついている……………)

寝ているために唇の潤いは僅かに削がれており、普段の豊かな心地よさには程遠く  
て、天乃は自分の唇を内側に巻き込んで舌で潤してから、また唇を重ねる

「……………」

「ふ………」

沙織が呼吸している間だけ、キスをするのだ。キスをするたびに頬に触れる沙織の  
吐息のくすぐったさなど気にならない。唇から感じる沙織の厚みのある弾力と、潤  
いが増すたびに自分に染まっているという微かな征服感。それらが流れ込んでくる  
と、体自体が心臓であるかのように熱を持って脈を打つ

「は……ふ……んっ」

溜まった唾液を飲むと同時に、間に合わず零れた一筋が沙織の頬を伝って

「……………」

天乃は躊躇なく舌先でそれを舐めとって唇を重ねると、瞬く間ににじみ出てきた自  
分のそれを沙織の口の中にほんの少しだけ流し込む

「……………」

沙織は小さく声を漏らしたが潤す程度の丁度良い量だったのだろう。飲み込むこと  
も起きることもなくまた穏やかな寝息を立てて、天乃は少し残念そうな笑みを浮

かべる。ほんの少しだけ、目を覚ましてくれることを期待してしまったのだ。だが、沙織は目を覚まさなかった。

(沙織……起きない貴女が悪いのよ)

天乃は意地悪なことを思いながら、世話係が着せてくれた沙織の寝間着のボタンを上から三つほど外し、顔を覗かせた鎖骨に吸血姫のごとく唇を触れさせて、優しく吸う。沙織の口から微かに呻き声が零れるが、天乃はそのまま唇の肉を持って力を入れては抜いて揉み解すような刺激を少しずつ与えていく

「あ……うっ」

沙織の声は普通よりも少し、艶っぽさを増してはいるが心地よさを与えられていると言えるほどには到達していない。まだまだだ。もっとだ。天乃はそう思う。

(こんな意地悪してるんだから……もっと、気持ち良くしてあげたい)

普段起きている分、キスはもつと濃密な絡み合いがあつたし、それだからこの高ぶりが全身を包むことで、身体に触れるころには半熟だったのかもしれないが、やはりそこに慣れていると、現状の薄い快感は物足りなく感じてしまうのだ。

「は……」

首筋から顔を上げると、一筋の流れが沙織の首元へと滴っていく……しかし、天乃は気にせず沙織の寝間着の一番下のボタンから二つを外し、見えた白いインナーの上から沙織の腹部を撫でる。布地の僅かな起毛感に阻まれながらも沙織の温もりと柔らかさが指先に届く。

「……筋肉、ついてないわね」

太っているわけではないが、痩せてもいない。かといって筋肉質でもない標準的な女の子の肉質を手に感じながら、天乃は人指し指から薬指までの指で沙織の臍周りに小さな円を描いていく。柔らかな脂肪はぐにゅりぐにゅりと心地よくほぐれてはすぐ真下にある強くもない筋肉への接触を許す

「あ……んっ」

少しずつ体に熱が溜まってきて感度も良くなり始めているのか、沙織の頬は最初に比べ赤みがかつてきていて、鼻での呼吸は口での呼吸へと切り替わり、仄かに生暖かい吐息が零れ落ちていく。

「んっ……ちゅ……」

天乃はそんな沙織の潤いを残した唇に唇を重ねると、自制心を持って抑え込みながら舌と舌を一瞬触れ合わせて、引き抜く。鼓動の痛みは欲求の催促。意地の悪い性欲の取り立てから逃れるように天乃はもう一度沙織の唇を重ねて奪うと、舌と舌を触れ合わせて、絡めて……ねっとりとしたどちらのものかも不確かな産物をかすめ取って飲み込む。

(味覚なんて、無いはずなのに……沙織だって、分かる)

口元から溢れた僅かなそれを指で拭い、沙織の腹部を覆うインナーをずらし、目を奪うためとしか思えない窪みに濡れた指を触れさせる

んっ……………はあ……………あ……………」

はあ……………はふ……………んくっ……………はあ……………」

沙織の熱っぽい吐息が一瞬途切れて媚声にも似た声が零れ落ちたのを耳にしながら、天乃は自分の荒い吐息を飲み込んで額の汗を拭うと、沙織の呼吸の合間に唇を重ねながら寝間着のボタンをすべて外し、沙織の程よく育った乳房を守る下着を見つめる。天乃への好意が全開なのか、おしゃれなレース刺繍が施された子供には早い桃色の下着はやはり背中側にホックがついていて、天乃は本当は外した方が良かったけど。と、恐らくは高いであろう下着のことも考えつつ、沙織の胸から臍までの間、その見えない中央線に倣うようにして舌を滑らせる

んっ……………はっ……………う……………」

びくびくと沙織の体が反応する。天乃は自分の手でも気持ちよくさせられていることに安心する反面、眠っている沙織に悪戯している罪悪感を併せ持ちながら、沙織のお腹を懐いた犬のように舐めて、味わって、少しずつ上へ、上へと昇りつめて下着からはみ出た柔肉をぺろりと味見する。味覚はなくて何も感じないが、しかし心は満足げに天乃の体の中で疼いて……………」

(そっか……………目の前に居るのが沙織だからじゃない……………体が、心が……………)  
自分の何が沙織であることを感じ取っているのか、それがなんとなく判った気がして、天乃は少しだけ嬉しさを感じて笑みを浮かべる。

壊しちゃったら……………新しいの買いますよ。一緒に」

沙織のブラの肩紐を伸ばして調節し、空いた隙間から手を忍ばせて沙織の乳房に触れる。上からゆっくりと滑り込ませながら、スプーンを扱うように右の乳房を下着の中から掘り出して、果肉の大きさに対して可愛らしく小ぶりの乳頭をぱくりと啜える。

んっ……………っは……………」

ん……………はむ……………んちゅ……………」

開けば糸引くほどに待ち焦がれていた口腔。こぼれ出てくるねっとりとした淫靡な吐息を自分で感じながら、天乃は関係ない。と、沙織の柔い果実を手の平全体で擦るように揉み、旨味成分が詰まっていることを示すように実からはみ出た紅一点を唇で包み、舌先でチロリと舐めては離れ、そのすぐ横に口づけをする

はあ……………んっ」

沙織の寝息はもはや寝息と言うよりも行為の最中の吐息のようだったが、離れればまた段々と寝息へと戻っていくばかりで目を覚ます様子は微塵も感じられない。そんな反応を横目に、天乃はじっくりと乳房を味わいながら、空いた手で沙織の腹部を弄り、描く楕円を少しずつ広げて下腹部をその指先で掠める。

んっー」

一際強く……しかし一瞬。沙織の体が大きな反応を見せて。天乃は思わず手を引いたが、それでも目を覚まさないのを確認すると沙織の唇にキスをして呼吸を見送り、またキスをして……ぬちゅり。と、淫猥な音が弾ける。沙織からのアクシオンはまったく無いが、沙織の身体はしっかりと感じているようで、寝巻きの上からでも、沙織の下腹部のにゆるりとした滑りの良さを感じて天乃は小さく笑みを浮かべる。だが、まだまだだ。

(もつと、沙織はしてくれるわよね……丁寧で、優しく、気持ち良く)

沙織が、東郷が、友奈達が。皆が自分にしてくれることを思い出すたびに体が疼く、触れて欲しいと下腹部が切なげな声を漏らしているような幻聴が耳を襲う。

(だめ……貴女は、おあずけ)

それでも、天乃は自分に対して手を出すのは押さえ込んで沙織と唇を重ねると、唇同士糸を引かせながら沙織の寝巻きのズボンの中に手を忍ばせていく。手に感じる淫らな熱気。鼻腔を擽る情欲の色香。早鐘を打つ心臓。天乃はその昂ぶりに導かれるがままに下着の上から沙織の陰部に指を触れさせる。

あっ……ん……」

沙織の体が小さく動いたが、天乃は気にすることなく人差し指を使って沙織の下腹部、秘境の入り口に指を這わせていく。傷口に薬を塗りこむような丁寧さで、優しさで。しかしながらしっかりと、少しばかり力強く。

(一気に行かないように、指先に集中して……少しずつ)

シルク素材特有の指に纏わりつく生地感は溢れ出てくる花蜜に容易く飲み込まれて殆ど感じられず、触れるたびに滲む淫欲の湧き水に指先が浸されていく。

んっ、くっ……っは……ん……ん……」

もはや起きているのではないかと思うほど沙織の吐息は荒々しくなっていくけれど、瞼は閉じられたまま動かない。時折目を覚ますのではと言っ反応こそあるが、やはり起きることは無く、天乃は沙織の唇に唇を重ねると、艶かしく潤った舌を使って沙織の舌を味わう。上下左右から舌先や腹を使って強く、優しく、微かに、確かに。沙織の舌と触れ合い絡み合っ沙織に天乃自身を取り込ませていく。

んっふ……んっ……んちゅ……」

んっ……っはあ……っは……あっ」

口元がいやらしく艶やかになっていく……だが、天乃は汚らしいとは微塵も思わない。自分のものならそう思うかもしれないが、そこには沙織のことも感じるから。

はふ……ん……ん……んっ」

つばを飲み込み喉を鳴らした天乃は、僅かに揺らぐ視界の中、確かに見える沙織の頬に手を宛がって、軽くキスをする。ここまで行ってきた深いものではなく、一番初

めに行うような接触程度のキス。それが、濁流のように襲い掛かる快樂を押しとどめてくれるのだ。

沙織……好きよ……」

夏凜達のことでももちろん愛している。だが、当然ながら沙織のことも愛している。なし崩し的に全員との交際を選択肢、仕方が無く愛されているように思われるかもしれないが、そんなことは断じてない。天乃は夏凜のこと、友奈のこと、東郷のこと、風のこと、樹のこと、若葉のこと、沙織のこと……好きだ。当然、恋愛的な意味を除けば園子や千景たちのことだつて好きだし、愛している。それはさながら母親のように。

（ごめんね……こんな、いやらしくて）

だからこそ、天乃は悲しみを伴う。歯止めの利かない情欲に流され、沙織にみだらなことをしてしまっているという罪悪感に涙を零す。それでも、天乃は止まらない。

「うー」

沙織の手に余らない乳房、可愛らしく膨らむ乳頭を手で包み込むように揉みながら、まだ手をつけていなかった左の乳房を露出させ、ふと、息を吹きかけると舌だけでも沙織は微かに反応を示したが、天乃はすぐにもう一度息を吹きかけると舌先を窄めて舐める。縦に、横に、押し潰したり伸ばしたり、沙織の声を頭上に受け止めながら情欲を反射する艶を与えてまた息を吹きかけると、さっきよりも強い声で沙織が呻く。刺激を受け入れるためか、求めているからか……それとただ、蒸れた感覚が気に入らないからか。自分から開く沙織の股座から湿った手を抜いて、惜しくも人工灯の物足りない光ではあるが、妖艶に輝きを放つ指先の一滴を口に含む。

「ふ……あむ……」

今の天乃に、抑圧は無かった。罪悪感に縛られる一方、集約された性的欲求による導きは限度を超えて天乃を狂わせていたし、行為に入り発情した沙織の身体から溢れ出す淫靡な香りはそれを際限なく際立たせてしまうからだ。性欲が抑制できない。その実に下らなく、しかし圧倒的な敗北を前に天乃はただ、沙織のみを感じようと自分の寝巻きのボタンを外して肌蹴させて、ブラのホックを外して沙織と同じ状況を作ると、そのままゆっくりと重ねていく。手と手、腕と腕、乳房と乳房、動かせない足はそのままに体を重ねてその熱を全身に焼き付けていく。

（火傷しそう……心臓が弾けそう……）

胸を打つ絶え間ない痛みを感じながら、しかし、天乃はその高揚感を糧に沙織と唇を重ね合わせる。ねっとり、じっとり。互いの呼吸が重なり、押し付けあう胸が潰しあつて先端の敏感な部分を擦り合う。濡れたそれはまるで一本の舌のようで、天乃と沙織はどちらとも嬌声を零してはキスを……蕩けた熱気を吐き出す。

「起きなごのっ」

「ここまでしてもまだ起きないの？」と、声をかけたが、沙織は反応を示すことなく息を吐くだけで。天乃は沙織の下腹部にそうと手を滑らせると、今度は下着の中から直に指先で触れる。滑らかな肌は愛に濡れて、情欲のはけ口は軽く押せば薄く開いて侵入を誘おうとする

「っ、っあ……」

ほんの少し触っただけで、沙織は可愛らしい声を出す。もっと苛めたいと思ってしまふような、甘える声。艶がかった吐息。それはとても魅力的で、天乃は唇を啜えるように情欲的なキスをする。と、下腹部に忍ばせた右手の中指に神経を集中して沙織の陰部を刺激する。擦るだけでぬちゅり、ちゅぷりと卑猥な水音を立てて、軽く押せばくぷり……と、指先が微かに入り込む。入れすぎれば場合によっては沙織の初めてを奪うことになる――無意識でなければ自分で求めるだろうが――の気を以て、せいぜい第一関節まで。

(爪で傷つかないように……)

僅かな挿入を行ったまま指を上下にスライドさせて割れ目のふち、膈壁の側面、陰核の裏側を刺激していく。少しずつ快楽が蓄積されていく沙織の横で、天乃は自分の下腹部に濡れそぼった不快感を覚えて……自分の手を伸ばす

「……ふっ……んっ……」

ほんの少し触れただけで快感が迸って、天乃は思わず呻いた。その間にも、すでに生命の一槍を受け入れている天乃の淫口は沙織の秘部よりも容易く指先を受け入れて、淫らかな蜜を滴らせて手を濡らし、下着にシミを広げていく。沙織の体と自分の体の双方に刺激を与える天乃は足で自重を支えることは出来ず、沙織の耳元に突っ伏し、お尻を突き出すといったみっともない体勢になっていたが、今の天乃にはそれでさえ、糧だった。

(沙織に声が聞かれたら……それで目を覚まされたら……こんな格好、見られたら……)

恥じらいを感じる一方、それによって得られる果てしない高揚感に天乃はより激しく自分を責め立てて、嬌声を沙織の耳元に吹きかける。押し殺さないといけない。そう思いながら、声に出す

「っっ……あっ……」

「っ、はっ……はあ……っ」

淫らかな音が重なって響き、声が重複する。キスをしたかと思っても両手の使えない天乃にはキスをする余裕が無くて、びしょびしょに濡れた自分の手を抜き出して枕元に突くと、すぐさま唇を重ねる

「っ、んっ」

「っっ……っはっ……あっ……」

魅惑的な糸引く生温い舌を絡みとってすぐに離れて、二人分の混ざり合った唾液を飲み下す。

んくっ……ふ……」

体の中にそれが流れ込む。そんな深くまで感じ取ることが出来ないはずなのに、浸透していく感覚のような何かを感じながら、天乃はまた沙織に手を出しながら自慰行為に浸っていく。手の平に溜まった淫猥な水溜りは腕を伝って布団にまでシミを作り、沙織にいたっては下着や寝巻きは完全に塗れて、背中にまでその被害は伸びていく。

私も……限界……かな」

ビクビクと快感に震える沙織の耳元で囁き、自分と沙織の両方。女の子の割れ目の内側に隠れた秘境、快樂のツボを指先で掠めた瞬間――

んんんん……」

沙織と天乃は目を覚ましてしまいそうなほどの喘ぎ声を零して、身体を一度跳ねさせると、途切れ途切れの快感に打ち震える声を零しながら、口元から涎を滴らせる。沙織が穢れによる昏睡のような状況だからこそ目を覚まさない沙織を快樂に溺れさせ、その横で自分の下腹部を弄って淫欲を貪っている自分の惨めさ、卑しさに天乃は胸の痛みを覚えて唇を噛み締める

沙織……ごめんね……」

一度極限までの心地よさを感じておきながら、天乃は沙織の匂いが染み付いた手を自分の口元に宛がい、匂いを感じ、感じないはずの甘さを感じながらも一度体を震わせる。

う……う……」

その震えは心地よさだけではなく、悲しさもあった。けれど、手を止めることはできなかった。足りなかった。自分で慰めても、慰めても、物足りない。けれども体は持たなくて……

すみません……」

常駐する医療係へと詳細を省いて報告し後片付けを依頼したが、とりあえずは入浴するべきだといわれて、沙織の体に触れる。

ぞ、沙織……沙織」

んっ……んんっ……うっ？」

淫らな行為をしているときよりも不均等に体を揺さぶって声をかけると、沙織は少しばかり不快そうな声を漏らしながら目を覚ます。その寝ぼけ眼な状態の沙織をお風呂に入りましたよと誘う。

んー入る……ふあぁ」

眠そうにあくびをした沙織はゆっくりと目を開くと、体を少しだけ動かして、おおお……」と感嘆の声を上げる

「なんだか知らないけど体が軽い」

「……」

「やー久遠さんと寝るって最高だね」

癒し効果バツグンだよ、疲労回復の素質有だと、無邪気に喜びを見せる沙織の姿が、天乃にとっては罪悪感を刺激するものでしかなくて。素直に喜べなかった。目を合わせられなかった。ごめんねと、言うことができなかった。喜ぶ沙織、信頼してくれている沙織。それを裏切ってしまうことになるからだ

～END～